

## 動物展示施設二フレルにおける来場者の動物への興味・関心

岸本 恭子

[序論] 動物展示施設「生きているミュージアム二フレル」には、動物と来場者の仕切りがある「みずべにふれる」エリアと、仕切りがなく動物、来場者ともにエリアを自由に移動できる「うごきにふれる」エリアがある。本研究では来場者の動物舎前の行動と、動物への興味・関心の特徴をこれら 2 つのエリアの間で比較した。本研究の目的は、動物と人間がより身近に接することができる環境における来場者の行動と、動物を見る前後で動物への興味・関心がどのように変わるのかを明らかにすることであった。

[方法] 本研究は「みずべにふれる」エリアと「うごきにふれる」エリアを調査場所とし、来場者 205 人にインタビュー調査と行動観察を行った。「みずべにふれる」エリアにはホワイトタイガーなど 3 種の動物、「うごきにふれる」エリアにはモモイロペリカン、ワオキツネザルなど 14 種の動物が展示されていた。総観察日数は 38 日であった。調査の了解を得られた来場者に、各エリアを見る前と見終わった時に「エリアで最も興味を持つ/持った動物は何か」という質問をし、さらに、2 つのエリア内での来場者の行動を記録した。

[結果・考察] 両エリアを比較すると、「説明板を読む」行動は「みずべにふれる」エリアの方が行動回数、行動人数ともに多かった。調査したそれ以外の行動である、「カメラを向ける」「指をさす」「叫ぶ」「動物の真似をする」「動物に走って近づく」「動物から意図をもって離れる」「動物に声をかける」「ガラスを触る」「笑う」「驚く」といった行動は「うごきにふれる」エリアの方が行動回数、行動人数ともに多かった。平均滞在時間は「みずべにふれる」エリアでは 7 分 37 秒、「うごきにふれる」エリアでは 11 分 00 秒であり「うごきにふれる」エリアの方が有意に長かった。しかし、飼育動物の種数は「みずべにふれる」エリアが 3 種、「うごきにふれる」エリアが 14 種であったため、動物 1 種あたりの平均滞在時間は「みずべにふれる」エリアの方が長くなった。「みずべにふれる」エリアでは、来場者は説明板を見ながら 1 つ 1 つの動物をじっくり見ていることが明らかになった。

来場者が入室前に示した動物に対する興味・関心は、実際に動物を見ると変化した。「最も興味のある動物は」という質問に対して、「みずべにふれる」エリアでは 38% の来場者が入室前後に回答を変化させ、「うごきにふれる」エリアでは 80% の来場者が回答を変化させていた。実際に動物を見た後ではホワイトタイガー、ワオキツネザルなど活動性の高い動物により興味が集まっていた。さらに、興味の変化が大きかった「うごきにふれる」エリアでは、「来場者に対して動物が近づいてくる」要素も興味の高さに影響を与えていた。モモイロペリカンなどのように来場者のそばに近づいてくる動物への興味が増していた。また、近づいてくる動物に対して来場者は「カメラを向ける」「動物に声をかける」などの動物に向ける行動を頻繁に行っていた。

動物と人間の仕切りのない環境では、来場者は目の前の動物と 1 対 1 のコミュニケーション空間を創造し、動物からのアプローチに積極的な対応する行動をとることが分かった。(比較行動学)